

Title	文学社会学の諸潮流：フランスを中心に
Sub Title	The currents of the sociology of literature in France
Author	小倉, 孝誠(Ogura, Kōsei)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.56- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：文学社会学の可能性
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0056

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文学社会学の諸潮流

——フランスを中心に——

The Currents of the Sociology of Literature in France

小倉 孝誠

筆者（小倉）は近代フランス、とりわけ 19 世紀から 20 世紀初頭にかけての文学と文化史を研究している。文学としては、とりわけ小説ジャンルをおもな分析対象に据えてきた。

バルザック、スタンダール、フロベール、ゾラ、プルーストによって代表されるこの時代の小説は、同時代の社会の現実と深く切り結び、その現実を表現したリアリズム小説であり、リアリズム小説は社会学的な研究に適している。実際この時代のフランス小説はマルクスに高く評価され（とりわけバルザック）、20 世紀のマルクス主義批評や文学社会学にとって特権的な分析対象だった。フランスをはじめとするフランス語圏諸国の近年におけるその動向を素描するのが本稿の目的だが、その前に本日の三件の報告にたいする感想を簡単に述べておきたい。

1. 報告者へのコメント

清水学氏は、文学と社会学の接点を三つのタイプに分類している。文学作品を社会学の理論や方法論で分析する「文学の社会学」、文学をつうじてそれが書かれた時代と社会の構図を説明する「文学からの社会学」、そして社会を広い意味での文学現象と見なして、文学的思想の枠組みで社会を理解する「社会の詩学」である。第三の「社会の詩学」は社会学の一分野として位置づけられるが、社会や文化をひとつの文学言説として把握するという視点は斬新だ。図書館、博物館、美術館といった知の集積された空間をこの観点から分析する可能性を、清水氏は多様なテーマによって例証してみせた。

松下優一氏の沖縄文学をめぐる報告には、多くの点で蒙を啓かれた。沖縄文学の歴史と現状に疎い筆者からすれば、「沖縄文学」という括弧つきの概念が成立する、成立しているという状況がまず新鮮に映る。それはたんに沖縄という地名や地理的概念の問題ではなく、日本の内部における「他者」性の文学であるという視点を含んでいるからだ。その他者性は、たとえば本州の人間とメディアが「祝祭的な風景」や「楽園の島」といった言葉で流布させるイメージによって、安易に商業化されたり、巧妙に隠蔽されたりしている。

松下氏の博士論文『〈沖縄文学〉の社会学』はこのような基本認識に立脚したうえで、ブルデューの『芸術の規則』で示された「作品の科学」の方法に大きな示唆を受けつつ書かれたという。沖縄で文学に携わる書き手自身が「沖縄文学」という言葉によって沖縄独自の文学の可能性について語り、また沖縄という歴史的、社会的文脈性を強く意識せざるをえないところで書いてきた。つまり〈沖縄文学〉は書き手自身によって担われる実践的側面をおびている、ということだろう。

だとすれば、沖縄をめぐって東京のメディアと政治がつくりあげた紋切型の言説や表象に対抗し、それに異議申し立てる文化的実践として「沖縄文学」を位置づけることが可能になる。サイードの『オリエンタリズム』は西洋による東洋の捏造を論じたポストコロニアリズム批評の基本文献だが、その論法に倣って、本土の文化とメディアによる「沖縄の捏造」を語ることも可能だろう。

マルクス・ヨッホ氏は、ブルデューの方法論に依拠して、現代ドイツを代表する作家エンツェンスベルガーの位置と価値を分析した興味深い発表をした。小説家と異なり、彼のような詩人、批評家がベストセラー作家になることはないが、そのことと、文壇（ブルデューの言う「文学場（*champ littéraire*）」における評価は別問題である。ヨッホ氏が述べたように、彼の作品の質、彼が受賞したさまざまな文学賞、そして彼についての評論などを考慮すれば、彼は現代ドイツで最も優れた作家の一人である。ブルデューの言う「象徴資本（*capital symbolique*）」が文化空間において相対的に自律性を保つということの、ひとつの例であろう。

エンツェンスベルガーはその長い文学的経歴をつうじて、政治的立場を微妙に変えた（少なくとも彼を批判する人々から見れば）。ヨッホ氏は、文学場と象徴資本にもとづく分析に、政治的評価の基準というもうひとつの要素を取りこんで、エンツェンスベルガーのドイツ文壇における地位の複雑さを指摘した。そしてブルデューの理論においては、この政治的要素への目配りが相対的に稀薄で、文学場や象徴資本の自立性を過大に評価しているのではないか、という疑問を提起したのは鋭い指摘である。

2. 先駆者たち

さて欧米各国で文学社会学はそれぞれ独自に発展し、各国が代表的な理論家、批評家を生んできた。イギリスでは『田舎と都会』（1979）のレイモンド・ウィリアムズ、『文芸批評とイデオロギー』（1976）のテリー・イーグルトン、ドイツではベンヤミンとフランクフルト学派、アメリカでは『オリエンタリズム』（1979）のエドワード・サイード、『政治的無意識』（1981）のフレドリック・ジェイムソンなどが代表だろう。そしてそこに共通しているのは、少なくとも1970年代まではマルクス主義の影響が強かったことであり、それはフランスも例

外ではない。リュシアン・ゴールドマン、アルチュセール学派に属するピエール・マシュレーやジャック・ランシエールなどが挙げられよう。

これらの理論家が共有するもうひとつの要素は、彼らがおもに近代小説、とりわけリアリズム小説を特権的な分析対象に据えていること、逆に言えば、詩や演劇や自伝ではなく近代小説こそが、文学社会学が練りあげられる恰好のジャンルだということである。イギリスのディケンズやジョージ・エリオットやギッシング、ドイツのゲーテやトーマス・マン、フランスのバルザックやフロベールやゾラ、アメリカのメルヴィルやドライサーなどがこうして頻繁に研究されてきた。フランスに関するかぎり、その傾向は現在も変わらず、たとえばブルデューの『芸術の規則』(1992)は、フロベール『感情教育』(1869)の緻密な分析から始まっている。

清水氏、松下氏、ヨッホ氏の報告に応答するかたちで、以下では、フランスにおいて文学社会学がどのように展開してきたかを述べてみたい。三人の報告者の発表においても、ブルデューなどフランスの文学社会学への言及がなされていたことにも示されるように、この分野でフランスおよびフランス語圏地域の貢献は無視しえないことを確認しておきたい。なお論者が文学研究者なのか社会学者なのかによって、つまり研究の軸足をどの学問分野に置くかによって、文学社会学にたいする認識は少し異なる。社会学者にとって、文学作品は数多くある素材や資料のひとつであり、たとえば統計資料、世論調査、映画、漫画などによって代替可能である。社会学者は文学をとおして、あるいは文学から出発して社会のメカニズムを把握しようとする。

他方、文学研究者にとっては作品それ自体、文学そのものが対象であり、文学のなかに社会の表象を読み取ること、文学現象(作品、作者、批評家、出版、文壇、読者、受容)を同時代の社会のさまざまな要素と関連づけながら分析することが目的である。その際、文学が社会の現実を正しく反映しているかどうかはあまり問題ではなく、したがって現実との適合性の強度が文学作品の価値を決定する指標ではない。むしろ文学には、同時代の現実を独自の視点から解釈する、つまり現実を表現するだけでなく、現実を創造するという側面があり、さらには新たな人間観を創出するという機能がある。以下では、文学研究者の立場からみて、文学を理解し、解釈するうえで文学社会学がどのような貢献をしてきたかを叙述する。

文学が社会の産物であるという認識は、現代のわれわれにとっては当然のこととして受け入れられるが、フランスでその認識が広まるのは 19 世紀初頭のロマン主義時代である。それ以前の古典主義時代の美学は、人間性や感情や理性の普遍性(つまり時代や、社会や、民族によって規定されない側面)を措定し、その普遍性を表象することを重んじた。しかしフランス革命とその後の変動を経て、人々は人間存在が歴史に強く規定されることを自覚する。それが学問としての歴史学を成立させるわけだが、この時代は同時に文学の歴史性と社会性が意識された時代でもあった。こうして「文学は社会の表現にほかならない」という定式が、作家や思想

家のあいだで広く共有されるようになっていく。その代表がスタール夫人（1766-1817）である。

まさに世紀の変わり目である 1800 年に刊行された、一般に『文学論』と呼ばれる彼女の著作の正式のタイトルは、「社会の諸制度との関係において考察された文学について」という。宗教や、法体系や、習俗と文学の相関性に着目し、文学がどのような政治的、倫理的要因によって変化していくのかを問いかけた。第一部で、古代ギリシア・ローマから 18 世紀末までのヨーロッパを対象にして、比較文学論を展開し、第二部ではフランス文学の同時代的状況を概観したうえで、革命後に成立した共和政のもとで文学がどのような方向性をとるのかを考察した。古典的な普遍主義と決別し、歴史的な相対主義の視座から各国に固有の国民文学という概念を定式化した功績は大きい。

スタール夫人のような先駆者はいたものの、文学社会学がフランスで際立った発展を示すのはそれよりはるか後、第二次世界大戦後のことである。その発展をうながすきっかけになったのは、ハンガリーの哲学者・批評家ジェルジ・ルカーチ（1885 - 1971）の一連の著作だった。ルカーチは『小説の理論』（1920）において、古代、中世の叙事詩と比較しながら、近代ブルジョワ社会が生み出した小説の特徴を明らかにしようとした。叙事詩と小説は、人生と世界をめぐって全体像を示すという点で共通しているが、叙事詩においては、生の意味が個人の帰属する共同体によって内在的に保証されているのに対し、近代小説においては、生の意味や価値がもはや自明のものではない。叙事詩においては、主人公と世界は調和しているが、小説においては主人公と世界、個人と社会がしばしば鋭く対立し、外部の現実には葛藤と偶発性の要素として個人の生に介入してくる。したがって近代小説とは、失われた全体性を個人が回復する試み、意味と価値の探求をつうじて個人が社会と和解しようとする試みとして構築される、とルカーチは述べた。

このような基本認識にたつて、ルカーチはヨーロッパ近代小説を、（1）主人公がみずからの主観性の要請に外部世界を従わせようとする「抽象的理想主義」（たとえばバルザックの作品）、（2）理想と価値を追求する主人公の営みが、外的現実の壁にぶつかって挫折する「幻滅のロマン主義」（典型は『感情教育』）、（3）主人公が主観性と外部世界の調和を図ろうとする「総合的営み」（ゲーテやトルストイの作品）という三つのカテゴリーに分類した。その後の著作『歴史と階級意識』（1923）、『歴史小説論』（1937）、『リアリズムの問題』（1948）なども、第二次世界大戦後のフランスで大きな波及力をもった。

フランスにおいてルカーチの文学理論を批判的に継承し、文学社会学にひとつの方向性をあたえたのがゴールドマンやマシュレーだった。ゴールドマンは、文学作品とはひとつの社会集団の世界観を一貫した構造によって表現するものだ、という前提から出発する。ここで世界観とい

うのは、ある集団（しばしばひとつの社会階級）のメンバーを結びつけ、彼らと他の集団を差異化する欲望、感情、思想の総体をさす。それは現実を解釈する統一的な視点であり、集団の産物ということになる。こうしてゴールドマンは『隠れたる神』（1955）において、パスカルの『パンセ』とラシーヌの戯曲を分析しつつ、そこに 17 世紀の法服貴族の悲劇的世界観を読み取ったのだった。他方マシュレーは、文学のなかに整合的な世界観の表象をみるのではなく、むしろ作品が提示する社会や世界の内部に見られる矛盾や亀裂にこそ、文学のイデオロギー性を見いだそうとした。バルザックの『農民』とジュール・ヴェルヌの小説を問いかけた『文学生産の理論』（1966）に、それがよく表われている。

3. フランスにおける文学社会学の諸潮流

こうした先駆者の後、20 世紀末から 21 世紀にかけて、フランスにおける文学社会学は多様な方向に分岐する。それは文学という現象のどの構成要素を問うかで異なる。では、文学社会学の対象とは具体的にどのようなものだろうか。大きく四つに分類できる。

(1) 作品

あらためて言うまでもなく、文学研究者からすれば分析の対象はまず作品である。そこで、テキストの内在的な分析から出発して、作品の言語的構造そのもののうちに歴史性や、社会性や、イデオロギーを読み取ろうとする。フランス語圏では一般に「ソシオクリティック sociocritique」と呼ばれる。詩、演劇、小説、自伝、旅行記、日記、エッセーと文学ジャンルは多様であり、どのジャンルを实践するかは作家によって異なるし、優勢なジャンルは時代と文化圏によって変化する。ジャンルによってアプローチの方法は変わってくる。また作品には主題、事件、登場人物、時間性、空間、言語、文体などさまざまな要素があり、それらのひとつひとつがソシオクリティックの対象になりうる。

作家は一定の意図をもって（そうした意図はしばしば手紙や日記や覚え書のなかで表明される）創作するが、完成した作品はかならずしもその意図を反映するとはかぎらない。研究者はもちろん、さまざまな資料に依拠して作家の意図と野心を再構成するが、他方でテキスト内部における社会的なもの、その矛盾や亀裂や歪曲や空白を問いかけることで、社会と歴史が表象されるメカニズムを探ろうとする。そこでは衣服や家具のような具体的なもの、しぐさや身体の描写、人物の言語や肖像、都市や田舎といった物語空間が、社会性をはらむ符牒として解読の対象になる。バルザックからフロベールを経てプルーストにいたるリアリズム小説においては、社会性の符牒となる細部がふんだんに織り込まれている。そこから作品のイデオロギー性に迫ることができるわけだが、その際、作品が現実を正確に映しだしているという素朴な反映

論とは決別する。ここでいうイデオロギーとは、社会と歴史にたいする個人の現実的な諸関係をめぐる想像的な表現を形成する表象システムである、という哲学者アルチュセールの考え方である。作家はこの表象システムに反発するにしろ、あるいはそれを積極的に支持するにしろ、無関係でいることはできない。

当然のことながらこのソシオクリティックは、社会現実との関わりが深い 19 世紀から 20 世紀初頭にかけてのリアリズム文学を恰好の対象にしてきた。実際バルザック、フロベール、ゾラなどは、現代の社会学者のように現地調査や関係者への聴き取りを行ない、その記録を社会生活を表象するための素材にしたのだった。彼らは同時代の社会と人間を表象し、分析することに見事な才能を発揮したことはあらためて強調するまでもない。社会学という学問が明確な輪郭をまだまもっていなかった 19 世紀に、これらの作家は同時代の現実を分析する社会学者たろうとしたのだった。この研究領域ではピエール・バルベリスのバルザック論、著名なゾラ研究者アンリ・ミットランの『視線と記号』（1987）など一連の著作、フィリップ・アモンの『テキストとイデオロギー』（1984）などが代表的な成果である。

（2）作家、流派、運動

個別の作品を超えて、作家や、その作家が帰属する流派や文学運動（ロマン主義、自然主義、シュルレアリスム、実存主義、ヌーヴォーロマンなど）全体を射程に据えることもできる。社会思想、科学思想、宗教思想と文学を関連づけながら、一時代の知的、芸術的営み全体のなかに作家と文学を位置づけようとする試みである。作品や作家から出発するが、特定の作品や作家をことさらに重要視するのではなく、ひとつの時代の知的パラダイム、あるいは「心性」の構成要素として文学を捉える。作品と作家のうちに時代を特徴づける社会的言説を聴きとろうとする姿勢、と定義してもいいだろう。文学史や思想史の領域で、このような方法論が採用されることがある。

フランスでこの流れを例証しているのは、『作家の聖別』（1973）をはじめとする一連の著作で、フランス・ロマン主義にたいする認識を刷新したポール・ベニシュである。同じフランス語圏では、ベルギーのジャック・デュボアの『現実を語る小説家たち』（2000）、カナダ・ケベック州のマルク・アンジュノの『1889 年、ある社会的言説の状況』（1989）なども貴重な貢献である。日本に例をとるならば、『万葉集』の時代から 20 世紀にいたる文学が、日本文化全体のなかでどのような役割を果たし、どのような歴史的発展の型を示し、どのような世界観を背景にしているかを明らかにした加藤周一の『日本文学史序説』（1975-80）や、明治期の文学を対象にして「風景」、「内面」、「告白」、「病い」などが文学制度のなかで

歴史的に形成されたトポスであると論じた、柄谷行人の『日本近代文学の起源』(1980)が特筆に値するだろう。

21 世紀になってからの特徴は、新聞・雑誌などの活字メディア、映画やビデオやテレビドラマなど映像メディアと文学の関係を問う研究が蓄積を増していることだろう。たとえば 19 世紀フランスでは、印刷技術の進歩と識字率の上昇にともなって活字メディアが飛躍的に発展した。それにともない、作家活動はジャーナリズムの様態と密接にかかわるようになる。小説の多くはまず新聞、雑誌に連載された後に単行本化された。作家の多くは生活の糧を得るため評論文や社会時評を新聞に寄稿し、世紀末から 20 世紀にかけて、人気作家は出版社や通信社の依頼をうけてルポルタージュを執筆する。そしてときにはインタビューを受け、それが活字化される。作家の手になる作品がかつてないほど多様化したのが、この時代の特徴だ。その点を確認したうえで、多くの部数を誇る新聞、雑誌が読書市場に流通したことが、作品の主題設定や、文体や、物語構築にも影響したのではないか、だとすれば具体的にそれが文学の言説をどのように変えたのか——そうした問いかけが、ブルデューの提唱した「文学場」の理論(これについては後述)を参照しながら展開している。アラン・ヴァイヤンの『文学の危機——ロマン主義と近代性』(2005)はその成果のひとつである。

広く文学を社会の表現とみなす立場からすれば、サイードの『オリエンタリズム』によって創始されたポストコロニアリズム批評や、ジェンダー批評も文学社会学の領域に入るだろう。フーコーやウィリアムズの考察をうけてサイードは、「東洋」が西洋の言説によるひとつの構築物にほかならず、西洋人の幻想とイデオロギーが反映されるスクリーンだと規定した。彼は 19 世紀イギリスとフランスの作家たちが書いた東方旅行記を論じ、さらに『文化と帝国主義』(1992)では視点を拡大して、当時のヨーロッパ小説に潜んでいる植民地主義的な表象をえぐり出した。同じような方法は、フランス以外のフランス語圏文学や、カリブ海地域の「クレオール文学」を考察するに際しても有効性を発揮する。他方ジェンダー批評は、女性、家族、セクシュアリティをめぐる男性作家たちの無意識の価値観と偏向性を明るみに出す。文学は女性の感情と身体をめぐる、さまざまな幻想とクリエーションを創出してきたのである。視点の転換によって、18、19 世紀に活躍しながら、その後長いあいだにわたって一般読者からも研究者からも忘却されていた、そして文学史という制度から排除されてきた数多くの女性作家たちが、現在ではあらためて注目を浴びている。そうした女性作家たちに光を当てることで、文学史を書き換える可能性を示唆するマルチヌ・リードの『文学における女性たち』(2010)は、その意味で挑発的なマニフェストになっている。

(3) 文学場と文学の制度

この領域では、ブルデュー社会学が主要な発想源になっている。

「社会的判断力批判」という副題をもつ『ディスタンクシオン』（1979）のなかで、彼は「文化資本」、「象徴財」、「場」など独自の概念を用いて文化の生産と受容のメカニズムを分析した。その連続性のもと、おもに文学を対象にしたのが『芸術の規則』（1992）にほかならない。ブルデューによれば、文学の自立性（「象牙の塔」の孤独）や、天賦の才能といったロマン主義的な神話は、19世紀中葉以降もはや有効性を失う。作家、批評家、ジャーナリスト、上流階級のサロン、出版社、教育機関、読者から構成される「文学場」のなかで、文学もまたひとつの制度として創出され、享受されるようになる。文学の生産と流通と消費を考察するためには、文学作品に判断をくだす際の基盤となる評価システムを分析しなければならない。そのような社会的規定のなかで、作家はいかにして創造の主体へと変貌していくのか——それがブルデューの問いかけだった。現代の文学世界にも通底するこのメカニズムを最初に体験した作家として、きわめて重要視されているのがフロベール（1821-80）である。

方法論や概念が異なるとはいえ、1848年の二月革命の挫折を生き、その歴史的挫折を新たな創造への糧とした作家としてフロベール、そして同年生まれの詩人ボードレール（1821-67）を特権化し、彼らを文学の近代性の創始者と見なすという視点は、サルトルのフロベール論『家の馬鹿息子』第三巻（1972）と共通している。『芸術の規則』はサルトルと共に、そしてサルトルに抗して書かれた著作と言えよう。ブルデューの方法論は社会学のみならず、歴史学、美術史、文学研究など多様な領域に強い影響力を及ぼしている。作家、画家、知識人など、芸術的、知的生産に関与する人々がどのような制度的力学のなかで創作活動を営むのかという主題をめぐる、研究が活況を呈しているのだ。ナタリー・エニック『芸術のエリート 民主主義体制下における優越性と個性』（2005）、ジゼル・サピロの『作家の責任 フランスにおける文学、法、道徳（19-21世紀）』（2011）などは、ブルデューの理論に依拠した見事な文学社会学の成果である。また歴史家クリストフ・シャルルの『自然主義時代における文学の危機』（1979）や『知識人の誕生 1880-1900』（1990）は、一時代の文学運動と知的世界の動きを歴史学と社会学の接点で考察した著作になっている。

（4）読者と受容の問題

（1）～（3）が作品と作家、そして創作活動が展開する文化的、制度的な場に関する社会学であるのに対し、四番目として、作品の流通と受容をめぐる展開される文学社会学の流れが存在する。この流れは作品の内在的意味や、作家の美学や、文学運動の意義を問うのではなく、書かれた作品、出版された作品がどのように流通し、どのように社会によって摂取されたかを研究する。古いところでは、ロベール・エスカルピが『文学の社会学』（1958）のなかで、製品としての文学作品をめぐる生産、流通、消費の市場メカニズムを論じ、文学にたいする読

者の趣味や評価を規定する教育機関の役割を強調した。読者がいなければ文学は存在しえないが、その読者における「受容の美学」に焦点を据えたのが、ハンス・ローベルト・ヤウスとヴォルフガング・イーザーを中心とするコンスタンツ学派である。ヤウスの『挑発としての文学史』（1970）に端を発した受容の美学は、1980年代に世界的に豊かな議論を誘発した。日本では前田愛の『近代読者の成立』（1973）が先駆的な業績であろう。

この領域では、文学史家や社会学者だけでなく、文化史家の研究を逸するわけにはいかない。フランスでは、とりわけ革命以前の旧体制時代を対象にした研究にすぐれたものが目立つ。アメリカ人ロバート・ダーントンの『猫の大虐殺』（1984）では、ルソーの著作や、検閲を恐れた地下出版物の流通と、同時代人による特異な受容が興味深く語られている。ロジェ・シャルチエの『読書と読者——アンシャン・レジーム期フランスにおける』（1987）は、文学だけでなく、そもそも一般に書物や印刷物が、読者層の限られた時代と社会のなかでどのように受容され、それが人々の心性と感性の形成にいかなる影響を及ぼしたかを説得的に論じている。

以上、フランスを中心に近年の文学社会学の諸潮流を、文学研究者としての立場から概観してみた。あくまで作品、作家、その受容に焦点をすえた文学研究の領域、という観点からの整理である。文学を社会現象のひとつとみなす、あるいはその制度的次元を強調する社会学者ならば、異なる著者たちを取り上げ、別の基準にもとづいて分類するかもしれない。

今後どうなるのか？ それは文学、文学研究、社会学がそれぞれどのような推移を示すかによるだろうし、予測するのは難しい。文学ジャンルとして、少なくとも日本では小説がいまだに主流だが、文化と社会における文学そのものの地位がかつてと同じではない。さらに現代では、視覚メディアの飛躍的な発展、パソコンなど通信機器の普及と、それにとまなうコミュニケーション手段の多様化を背景にして、文学を生産する作家と、それを受容する読者の態度も、文化的位相もおおきく変わった。新たなかたちの文学は、新たな解読方法を要請するだろう。

【文献】

Bénichou, Paul, 1973, *Le Sacre de l'écrivain 1750-1830*, José Corti. [ポール・ベニシュール『作家の聖別』片岡大右ほか訳、水声社、2015年]

Bourdieu, Pierre, 1992, *Les Règles de l'art. Genèse et structure du champ littéraire*, Seuil. [ピエール・ブルデュー『芸術の規則』全2巻、石井洋二郎訳、藤原書店、1995-96年]

Charle, Christophe, 1990, *Naissance des «intellectuels» 1880-1900*, Minuit. [クリストフ・シャルル『「知識人」の誕生 1880-1900』白鳥義彦訳、藤原書店、2006年]

Chartier, Roger, 1987, *Lectures et lecteurs dans la France d'Ancien Régime*, Seuil. [ロジェ・シャルチエ『読書と

- 読者——アンシャン・レジーム期フランスにおける』長谷川輝夫・宮下志朗訳、みすず書房、1994年]
- Darnton, Robert, 1984, *The Great Cat Massacre and Other Episodes in French Cultural History*, Basic Books. [ロバート・ダーントン『猫の大虐殺』海保眞夫・鷺見洋一訳、岩波現代文庫、2007年]
- Dubois, Jacques, 2000, *Les Romanciers du réel. De Balzac à Simenon*, Seuil. [ジャック・デュボア『現実を語る小説家たち』鈴木智之訳、法政大学出版局、2005年]
- Eagleton, Terry, 1976, *Criticism and Ideology: A Study in Marxist Literary Theory*, NLB. [テリー・イーグルトン『文芸批評とイデオロギー』高田康成訳、岩波書店、1980年]
- Goldmann, Lucien, 1955, *Le Dieu caché*, Gallimard. [リュシアン・ゴルドマン『隠れたる神』山形頼洋・名田丈夫訳、社会思想社、1988年]
- Heinich, Nathalie, 2005, *L'Élite artiste. Excellence et singularité en régime démocratique*, Gallimard.
- Jameson, Fredric, 1981, *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*, Cornell University Press. [フレドリック・ジェイムソン『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』大橋洋一ほか訳、平凡社ライブラリー、2010年]
- Jauss, Hans Robert, 1967, *Literaturgeschichte als Provokation der Literaturwissenschaft*, Konstanzer Universitätsreden [ハンス・ローベルト・ヤウス『挑発としての文学史』響田収訳、岩波書店、1976年]
- 加藤周一, 1980, 『日本文学史序説』平凡社
- 柄谷行人, 1988, 『日本近代文学の起源』講談社学術文庫
- Lukács, György, 1920, *Die Theorie des Romans*, Cassirer [ジェルジ・ルカーチ『小説の理論』原田義人、佐々木基一訳、ちくま学芸文庫、1994年]
- Macherey, Pierre, 1971, *Pour une théorie de la production littéraire*, Maspero. [ピエール・マシュレー『文学生産の理論』内藤陽哉訳、合同出版、1969年]
- Mitterand, Henri, 1987, *Le Regard et le signe. Poétique du roman réaliste et naturaliste*, PUF.
- Reid Martine, 2010, *Des femmes en littérature*, Belin.
- Said, Edward, 1978, *Orientalism*, Pantheon Books. [E.W.サイード『オリエンタリズム』今沢紀子訳、平凡社ライブラリー、1993年]
- Sapiro, Gisèle, 2011, *La responsabilité de l'écrivain. Littérature, droit et morale en France (XIX^e-XXI^e siècle)*, Seuil. —, 2014, *La sociologie de la littérature*, La Découverte. [ジゼル・サピロ『文学社会学とは何か』鈴木智之・松下優一訳、世界思想社、2017年]
- Staël, Germaine de, 1991, *De la littérature considérée dans ses rapports avec les institutions sociales (1800)*, GF-Flammarion.
- Vaillant, Alain, 2005, *La Crise de la littérature. Romantisme et modernité*, Ellug.
- Williams, Raymond, 1973, *The Country and the City*, Chatto and Windus. [レイモンド・ウィリアムズ『田舎と都会』山本和平訳、晶文社、1985年]

(おぐら こうせい 慶應義塾大学文学部)